

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第1回

第1章 坪田譲治先生

その1 「風の中の子供」

坪田譲治先生（1890～1982年）には、子どものころに2度お目にかかったことがある。

映画と小説

2023年正月の東京は、年末からの晴天がつづいていた。

1月3日、「早稲田松竹」（名画座）で、清水宏監督の映画「風の中の子供」を見た。1937年、松竹大船の作品で、モノクロ86分。原作は、坪田譲治の同じ題の新聞連載小説だ（『東京朝日新聞』夕刊、1936年9月5日～11月6日）。前から見たかったのだけれども、うまい機会がなくて、はじめて見た。（注1）佐藤忠男は、清水宏について「名演技をしようという欲のない子どもたちこそ理想の俳優であるとして、ノー・スターの子どもたちを主役にした映画を作るようになった。」と書いている（『映画は子どもをどう描いてきたか』岩波書店2022年）。

映画がはじまると、夏の田園地帯の風景が広がる。1学期の終業式の日で、通信簿をもらった子どもたちが家に帰るところだ。善太（演じるのは葉山正雄）は成績優秀だが、弟の三平（爆弾小僧）は「甲」が一つもない。三平は、遊んでばかりで、ちっとも勉強しないとお母さん（吉川満子）にしかられる。

夏休みのある日、三平と仲のよくない金太郎（アメリカ小僧）が、急にこんなことを言い出す。——「お前んとこのお父さん、今度会社をやめさせられるんだぞう。」金太郎は、何人もの子どもたちがいるところで、にやにや笑いながら、三平にいったのだ。三平が「ウソだあい。」という、またいう。——「ウソなもんかい。見ててみる。やめさせられて、おまわりさんにつれて行かれるんだ。」三平は、「バカッ」といって、そばにあった棒で金太郎の頭をたたくのだが、金太郎のことばはウソではなかった。

三平が、村のなかにあるお父さん（河村黎吉）の会社へ弁当を届けに行くと、お父さんと会社の人たちが言い争いをしていて、お父さんは、会社を辞めることになる。やがて、家に刑事がやってきて、お父さんをつれていってしまう。映画は、お父さんが無事に家に戻ってくるまでの善太と三平の不安に満ちた日々を描く。

帰宅して、久しぶりに坪田譲治の「風の中の子供」を読み直してみた。見たばかりの映画は、原作に忠実で、小説のなかの会話をそのまま生かしているところも多い。それでも、小説のほうが、「風の中の子供」の方法をよりはっきりとつかまえることができる。「風の中の子供」の方法とは何か。

事件と小説

「風の中の子供」は、作者が実際に経験した事件を素材にしている。水藤春夫作成「坪田譲治年譜」（『坪田譲治全集』12、新潮社1978年所収）の1933（昭和8）

年（43歳）には、つぎのようである。

七月、株主総会にて島田製織所取締役を落されたため、即日上京。この時から三年にわたって、生活のための苦闘が始まる。

東京で文学修業をしていた坪田譲治は、1919（大正8）年、母や兄にもとめられて、郷里岡山に帰る。家業の島田製織所の仕事をするためである。島田製織所は、譲治が生まれる10年前に父が創設したランプ芯の会社だが、その経営をめぐる争いが繰り返されていた。このことは、坪田理基男著『坪田譲治作品の背景—ランプ芯会社にまつわる話』（理論社1984年）にくわしい。理基男さん（1923～2017年）は、坪田先生の三男で、『絵をかくはと』（ポプラ社1972年）、『にせアカシアの花』（金の星社1972年）などの児童文学作家である。

1923（大正12）年、坪田譲治は、文学に専念しようとして上京するが、思うようにならず、1929（昭和4）年、ふたたび帰郷する。兄の死後、譲治は、専務取締役になる。けれども、やがて、兄の息子たちにその職を追われる。それが、「年譜」の一節を引いた1933年のことだ。「年譜」の1934（昭和9）年には、こうある。——「生活は苦しく、親戚友人たちを回って方々で借金する。」

山本有三の紹介で『改造』（1935年3月）に発表した「お化けの世界」が好評だった。「坪田譲治よ、近来君の花ひらく。正に慶賀すべきことなり。」——これは、旧友尾崎士郎のことばだ（「文芸時評」『新潮』1935年6月）。翌年の新聞連載小説「風の中の子供」で、譲治は、さらに文名をあげる。坪田先生は、ようやく苦境を抜け出そうとしていた。

「お化けの世界」や「風の中の子供」の題材になったのは、数年前まで作者自身はその渦中にあったランプ芯会社の内紛だった。が、この2作では、内紛の経過そのものが書かれることはない。事件は、善太と三平から見たそれとして間接的に描かれる。作品は、子どもたちの目の高さによりそい、子どもたちの視界の内をなぞるように語られていく。

「風の中の子供」の青山一郎は、ある日、どこかへつれて行かれる。父親がなぜ、どこへつれて行かれたのか、子どもたちにはわからない。

「大変なんですねえ」

これはおばさん。

「そうとも。」

おじさんの声。

「それで一郎さんの罪は？」

「私文書偽造というのだ。可哀想だが、一年や二年は行くだろう。」

（引用は『坪田譲治全集』3、新潮社1977年による。以下も同じ）

三平は、たまたま伯父夫婦の会話を耳にして、はじめて父がつれ去られたわけを知る。このとき、作品の読者にも、ようやく事情がわかるのだ。読者も、善太や三

平の視点で事の成り行きを見守ることになる。青山一郎が無実だとわかり、釈放されると、「いよいよお父さんの帰る日となった。」「お父さんは帰った。」と書かれる。地の文であるのにもかかわらず、「青山一郎は帰った。」とはならない。あくまで、子どもたちの立場から記述される。

もうひとりの「風の中の子供」

私もまた、「風の中の子供」だった。

私は、1955（昭和30）年8月3日、東京都北区西ヶ原に生まれた。父宮川健三郎42歳、母ひろ32歳のときの子どもので、一人っ子である。母宮川ひろ（1923～2018年）は、のちに児童文学作家としてデビューする。

私が生まれる少し前の1955年1月、父は、つとめていた会社、富士重工を退職して、横浜で富士重工の代理店、富士実業をひらいた。おもに、小型消防ポンプをあつかう。ところが、その富士実業は、1958（昭和33）年の暮れに不渡手形を出して倒産する。父が信用していた社員が使い込みをしたと聞いたことがあるが、詳細はわからない。東京都北区の自宅を売りに出す。1959（昭和34）年4月、自宅が売れて、負債を返し、5月には、板橋区赤塚の借家に入る。さらに、6月、板橋区下赤塚の建売住宅に転居する。父は、以後10年にわたって、様々な職を転々とするが、やがて、病気になって、はたらけなくなる。私は、不安な幼少年期をすごした。

「風の中の子供」であるということ、いや、子どもであるということは、どういうことか。松谷みよ子さんが、こんなことを書いたことがある。

幼児が部屋へかけこんでくる。その子にとって机の上はみえない。みえるのは裏側である。（中略）テーブルの上のすき焼きがぐつぐつ煮えていても、幼児は燃えるガスの焰と鍋の底しかみえない。幼い日、広いと思っていた道を、大人になってもう一辺（ママ）通ってみると、なんと狭いことだろう。」（「祖先と子どもとの合作」『文学・教育』1970年7月）

松谷さんのことばを借りていうなら、坪田譲治の「風の中の子供」は、「鍋の底」を描くことに徹した作品と呼ぶことができる。鍋のなかでは会社の紛争が煮えだぎっているが、子どもには、鍋の底しか見えない。鍋のなかに関する情報は、大人たちの会話そのほかによって、間接的、暗示的にもたらされるだけだ。

坪田譲治は、すでに、最初の小説集『正太の馬』（春陽堂1926年）に収められた「正太の馬」「正太樹をめぐる」などの短編で子どもを描いていた。1927（昭和2）年以降は、雑誌『赤い鳥』に童話を寄稿するようにもなった。けれど、子どもの目の高さから大人の世界を見るという方法は、「お化けの世界」「風の中の子供」まではなかったものといえる。

坪田譲治には、「鍋の中」の会社の紛争を正面から描いた作品もある。「青山一族」（『文藝春秋』1935年11月）、「兄・叔父・私」（『思想国防』1935年12月）、「最後の総会」（『文藝』1936年5月）などだ。ところが、それらよりも、子どもの目、「子ども」という鏡にうつった像としての事件を描いた「お化けの世界」や「風の

中の子供」のほうが作品の陰影が深く、ずっと成功している。

神宮輝夫は、「風の中の子供」や「子供の四季」において、「子どもは、大人のみにくさをうつすかがみとして、また、みにくさと対立する清潔で純粋なものとしてえがかれている」（『童話への招待』日本放送出版協会 1970年）という。「子ども」を純粋で無垢なものとして取り立てることは、ひとつの虚構にすぎないかもしれない。しかし、坪田譲治には、その虚構が必要だったのではないか。譲治は、「子ども」という鏡に、自分がかぐり抜けてきた世俗的な事件をうつし出してみたかったのではないか。「子ども」という視点に立って、事件とそれにかかわった自分自身を相対化したかったのではないか。

「子供の四季」（『都新聞』1938年1月1日～6月16日）も、「お化けの世界」、「風の中の子供」と共通の素材をあつかっている。ここでも、前2作で自覚された方法は生かされているが、同時に、その方法を逸脱する箇所も多い。作品の語りは、ときに、善太三平の視野の外にある事柄にまで言いおよんでしまう。「風の中の子供」にも、子どもたちだけで留守番していた家をたずねてきたのが執達吏だったと説明する一文があるけれども、善太三平の視界を語りが越えていかないというやり方は、おおむね几帳面に守られていた。（注2）

母宮川ひろ、坪田譲治先生に出会う

父が事業に失敗し、職を転々としていた、その時期に、母は、はじめて坪田譲治先生に出会う。1963（昭和38）年6月、中央線の武蔵境駅に近い私立学校、聖徳学園（東京都武蔵野市）で行われた「子どもをめぐる文化教室」に参加したのだ。これは、坪田譲治が母親たちに語るという「教室」だった。毎月第一土曜日に行われたが、1年間12回、休まずに出席した。

ここで、坪田先生に出会い、それがきっかけになって、日本児童文学者協会が主催し、これも坪田先生が豊島区雑司ヶ谷の自宅で開いていた家庭文庫「びわのみ文庫」を会場に行われた「新日本童話教室」（第2期）を受講することになる。そして、坪田先生が主宰していた雑誌『びわの実学校』（1963年10月創刊）に投稿するようになっていく。坪田先生との出会いは、母の人生も、そして、わが家の暮らしも大きく変えていくことになる。

「子どもをめぐる文化教室」のことは、山手線・駒込駅のホームのベンチに読みすてられていた新聞に割合大きな記事でのっていたのを父がひろってきて、母に見せたという。自称、元文学青年で、当時、「風の中」にいた父は、もしかしたら自分が参加したかったのかもしれないが、母親のための教室ということで母にすすめたというのだ。これは、母が語ってきたことである。新聞をひろったという駒込駅は、父の会社が倒産して引っ越す前の家、私が生まれた家の最寄り駅だから、どうして父がそこにいたのか、いまになってみると、母の話はほんとうかなと思わないでもない。（この新聞記事について、各新聞社のデータベースを検索したが、うまくヒットしなかった。）（注3）

父は、私が小学校を終わるころに具合が悪くなって、まる13年間病んで、1981（昭和56）年3月8日にとうとう亡くなった。67歳だった。

母のほうは、2018（平成30）年12月29日に亡くなった。95歳だった。おしまいの1年半あまりは施設で暮らしたが、それまでは元気で執筆もつづけていた。母は、晩年になっても、駒込駅のベンチの新聞の話の時折まるで「伝説」のように語った。（つづく）

（注）

- 1、「風の中の子供」は、DVDで見ることにもできる。『清水宏作品 第二集 子どもの四季』（松竹）に収録されている。映画のせりふは、このDVDから起こし、小説の本文の表記を参考にして書きとった。
- 2、「風の中の子供」にも、冒頭近くに下記のようなところがあるが、語りが、すぐに三平の視野のなかに引き返してくる。

ところが、どうしたことか、会社の門に子供が沢山集まっている。今日は会社の株主総会の日であった。三平のお父さんを重役から落す陰謀のたくらまれている日であった。金太郎のお父さんが代わって専務になるという日であった。然し三平はそんなことは何も知らない。

「おおい。」

と、みんなの方へ駆け寄った。

みんなは、今株主総会にやって来る成人の数を数えている。それらが皆三平のお父さんを重役から落して、金太郎のお父さんを専務に推薦する筈である。三平にはそんなことは分からないので聞いて見る。

「何やってんだい。」

返事するものが一人もない。とまた成人がやって来た。

また、時たま、語り手は、子どもたち同様、家に残されているお母さんのようすや気持ちを語ることもある。

- 3、このことを書いたエッセイ「一枚の新聞から」（『国文学 解釈と鑑賞』1998年4月、特集・坪田譲治・久保喬の世界）でも、母は、「夫が、山の手線駒込駅のホームから拾ってきたという新聞」と記している。そのほかのエッセイでも、母は駒込駅のことを語っているが、「処女作のころ……」（『びわの実学校』第109号、1982年1月）には、「子どもをめぐる文化教室」を開いたのが詩人で児童文学作家の山本和夫先生（1907～96年）だったこと、坪田先生の話のタイトルが「童話と人生」だったことが記されている。

（付記） 宮川健郎「坪田譲治「子供の四季」 「子ども」——無垢の鏡」（『国文学 解釈と教材の研究』1985年10月）と重複する部分があることをおことわりします。